

第4回 国際ホリスティック・ティーチング・ラーニング学会（南オレゴン州立大学） 報告

野沢 綾子

南オレゴン州立大学・マハリシ国際大学非常勤講師

2024年4月18-21日、南オレゴン州立大学ホリスティック教育センター主催で第4回国際ホリスティック・ティーチング・ラーニング学会が開催された。「共に栄える:切迫した状態を合有し、コミュニティに根ざす」をテーマに、コロナ以来初の対面学会に米国、カナダ、メキシコ、日本、韓国、タイ、マレーシア、インドネシア、バングラディッシュ、イスラエルから200名余が参加した。

前夜の歓迎レセプションで先達から感動の言葉を受け、19日南オレゴン大の元先住民研究ディレクター、パタワトミ族のデイビッド・ウェスト名誉教授による恒例の開会のオープニング・ドラム、歌に合わせて、ステップを踏みながら、参加者が二重の輪で自己紹介をし、大学長リック・ベイリー氏の歓迎の挨拶を受けた。

最初のパネル・ディスカッションは、ビジネスから教育までリーダーシップ研修で著名なマーガレット・ウィートリー女史 (Margaret Wheatley) と、先住民の世界観に基づく教育をアクティビストとしても国際的に啓蒙するフォー・アローズ (Four Arrows) 氏による「差し迫る危機の中での教育」に始まり、小グループでの対話が続いた。

午前中のプレゼンテーションは7つ。踏み込んだディスカッションの後だったため、ヨガの先生の体を動かすワークショップに参加し、テーマに沿った動きや、床に置かれた自然の中の物を選択した後、マインドフルに外まで歩き、何に惹かれて選んだのか、それをどう生かしていきたいのかを、一人ずつ話した。

ランチ後は、初回ラウンドテーブルは6つの選択肢から、「懲罰を超えて：生徒の全人格を大事にした学校での対立への解決」に参加した。地元のRESOLVE（対立解決と修復可能な正義のセンター）の修復可能な正義や非暴力コミュニケーションを用いた参加型ワークショップから、その普段の活動を垣間見た。

2つ目のラウンドテーブルで、「大学での『エコなコミュニティ創造』の授業をホリスティックに教える」を発表した。ホリスティック教育を基盤にした「持続可能で再生的な生活学科」の一講座で、地元・世界のエコ・ビレッジ、コハウジングなど新しいコミュニティの暮らしを参考に、フィールドトリップ、対話・プロジェクトベース、体験・プロセス重視の授業の実践報告と生徒のコメントを紹介した。今後どのような影響を与えていくのか、卒業生の進路は？など、興味深い質問を受け、今秋学生に質問したい。

午後はポスターセッションと2ラウンドの発表が続く。イスラエルのアミール・フリーマン (Amir Freimann) 氏のスピリチュアルなマスターへのインタビュー研究から、

「ロールモデルによる徳の会得」の発表と、西ジョージア大学トーマス・ピーターソン教授と学部生・大学院生による「青少年の希望と発見のスピリットに火をつける」SHINE交流プログラムの実践発表に参加した。世代間トラウマの考えを元に、危機的な状況にある11-18歳の未成年と大学生のサポートによる遊び、自分の内側をスパイラル状のチャートに沿ってオープンに話すなど、安心安全の場で癒しと成長がもたらされ、卒業後も交流が続くような信頼関係には涙を誘われた。

夜はキャンパス・テーマ・トークにて、ホリスティック教育の世界の第一人者、私の元指導教官でもあるトロント大のジョン・ミラー教授が「教育における愛」について情熱的に語り、フロアから若い世代の質問が相次ぎ、活発な会となった。

3日目の土曜日は、ヨガやグループでの分ち会いが行われた後、上記のミラー教授、前出のウェスト名誉教授、フェッツァー研究所のプログラム・オフィサーであるシャオアン・リー（Xiaoan Li）氏による、深い傾聴をテーマにしたパネル・ディスカッションで始まった。静かで豊かな雰囲気の中、パネラーの胸に響く発言に、LAで瞑想を実践する高校のアンドレア・パーセル校長より、何が響いたかを、それぞれのパネラーに一人ずつ伝え返す課題が出された。数人の伝え返しに、パネラーからも「こんなに深く聞いて受け取ってもらえたと確認できたのは大切な体験だった」とコメントを頂いた。

ランチ中にも、15年以上の高校教師の経験を元にコンサルタント・著者となったマシュー・レイノルズ（Matthew Reynolds）氏が、自分への自信を取り戻し、帰属感を持ち、意識を変えて教育に取り組む姿勢を情熱的に話した。

午後最初のセッションは、ウェスト名誉教授とミッシェル・パヴィリオニス氏の「協調的なコミュニティ：個人から地球規模へ」と題した、大地への意識とつながりに基づく先住民の世界観からの学びを体験した。教授の温かい語り口に口承文化の大切さが体现され、ミッシェル氏のホールド力もあって、参加者もどんどん自分の体験を話し出し、協調的なコミュニティ形成を体験できたかのようなようだった。

メイン会場に戻ると、フラダンスと脳科学についての発表者が率いる地元のフラダンス・グループが法螺の音とともに現れ、会場が沸いた。その後のラウンドテーブルでは、この学会共同オーガナイザーである南オレゴン大教育学部の学部生・大学院生（現役教師も含め）グループの学びの発表に参加し、深い質問を通して、学びの本質を語り合った。発達障害を持ち、学校で苦勞してきた学生が「自分のような子でも、教師になれている姿を見せることで勇気と希望をもってもらいたい」と、他の学生達との協働の中で成長した様子を語っていたのが印象的だった。

最後はタイのホリスティック教育をリードするルン・アロン（Roong Aroon）校幼稚園部のパウィダ・サエホ（Pawida Saeho）先生による、子ども達の自主的な菜園づくりに関するビデオを用いた実践発表に参加した。こども達の微笑ましい様子と、培われているスキルや非認知能力に感嘆の声が上がった。

その後はアウトドアで社会情動的スキルを学校教育と組んで教えているカリフォルニアのシネルジア・ラーニングセンターの体験ワークを通じた発表に参加した。午後の最後はパネリストたちを囲んでのゆったり小人数で語る焚火サークルが行われた。

夕食後はトロントの学会からの伝統、アートの夕べがカフェテリアで始まった。詩や歌、ダンス、尺八・ピアノの披露の中で、目を引いたのは、韓国のホリスティック教育研究所の宋ミンヨン氏が、韓国と北朝鮮との DMZ 非武装地帯の国際平和学校建設のために「On a hill at the DMZ」を歌ったことだ (<https://www.facebook.com/borderpeaceschool/?fref=ts>)。会場も Let's dream as one と声を揃えた。日本語を話す二人と共に私も、宮崎監督が日本のスピリチュアリティを映画にしていることに触れ、楠の木の化身である「トトロ」の意味や、ホリスティック教育者として共に歩こうという思いをこめて「散歩」の曲を送った。足踏みから始め、ハイタッチと共に笑顔で会場を行進する教育者達に感謝が沸いた。

翌朝の2セッションの最初は、オーガナイザーと今後のアジア太平洋ホリスティック教育ネットワークの話し合いをしたため不参加で、最終発表は南オレゴン大のレネー・オーウェン (Renee Owen) 教授の「植民地時代の構造から生きたシステムへの変容：ソシオクラシーの導入について」に参加した。煩雑なくみをビジュアル化し、またグループに分かれた様子から感覚的に掴むことができ、生きたシステムとして、すっと理解できた。

閉会はデイビッド教授の太鼓を皆で囲み、歌を真似しながら、深い静かな場に誘われた。フォー・アローズの元気な先住民の歌でこれからの旅路への元気をもらった。

今回若い現役学生・大学院生 (現役教育者) のリーダーシップを目にして、この教育学部ホリスティック教育センターの立役者、ウィリアム・グリーン (William Green)、ヨンヒー・キム (Yonghee Kim) 両教授、スタッフ全員のすばらしい存在を感じた。高校まで言われることがなかった「I love you」を大学に入ってから毎日浴びせられ、仲間と共にどんどん自信が付き、感謝でいっぱいという若いリーダー達の姿、そして世界中の子ども達の笑顔の学びの様子に、緊急事態を孕む現在にも希望の光を見ることができた。

北朝鮮との緊張に危機感を持つ韓国の宋氏と、戦争勃発後一変したウクライナ出身の夫と家族の人生を語り合い、お互いの嘆きの涙から、I am strong, I am powerful とレーノルズが皆に言わせた時のような再生の想いが生まれた。そして、大地とつながる世界観を体現する先住民の智慧が今以上に必要とされている時はないという思いに呼応するかのよう、彼らの存在がいつもより更に強く感じられ、大いなる命である各々の存在を確認し合いながら、この特別なエネルギーの場を後にした。

今回は4月開催だったため、京大から派遣された大学院生兼高校教師イリーナ・スミコブスカヤさん以外に日本からの参加者はいなかったが、次回アジア太平洋ホリスティック教育ネットワーク会議には日本からの実践の声が届くことを願う。